

## 道を論じて孫中山に及ぶ

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 小柳 司氣太  |
| 雑誌名 | 漢文學會々報  |
| 巻   | 1   |
| ページ | 1-6   |
| 発行年 | 1933-03-10  |
| URL | <a href="http://doi.org/10.15068/00146073">http://doi.org/10.15068/00146073</a> |

## 道を論じて孫中山に及ぶ

小柳 司 氣 太

本日此の漢文學會の發會式にあたつて、お話をすることは私の喜びとする所である。そこで私は、平素考へてゐる一端を論じて、皆様の意見を聞きたい。私は漢學中に於て支那哲學を研究してゐる。支那哲學思想を研究すると、西洋哲學と趣が違つてゐる。即ち西洋哲學から支那哲學を判斷するに、支那には西洋流の哲學がないと云つて宜しい。其は西洋哲學は眞理の研究である。支那思想又は東洋哲學は道の研究で、道が對象である。眞理は知識であり、道は吾人の知識だけではなく、知情意の働さを云ふ。支那哲學は聖、道、教、學の四つが頭に入らねば正しい判斷は得られない。今日は此の大切な道に就いてお話を致したいと思ふ。

「道」とは吾人の道路が本義で、日本では「みち」と云ふが、「み」は所謂接頭語で、「ち」が路である。道路は一定の筋道と云ふ事で、彼此の關係を示すものである。「換言すれば、道とは天下公共のものであり、歴史的のもので、誰が作つたと云ふ事なく、茫々たる原野に人類の生存と同時に生じたものである。されば道は自ら實行を伴ふものである。人が歩かねば、道は元の道なきと同じである。吾人があるく道路は其様な性質を帯びてゐるものである。又、道は實證的、實際的であつて、抽象的のものではない。其の様な事が吾人が歩く道路に就いての條件である。天道、地道、人道とは其を類推したものである。日月が一

定の關係を保つが如く、一定の條理、一定の關係を持つてゐる天の道が天體を生じたものに違ひない。地にも道がある。地球は數萬年を経て成立したものである。地球内部には、鑛脈もあれば石炭脈もあり、又地震脈もある。斯の如く道は天地人を一貫したものである。此を支那語では「文」とする、即ち天文、地文、人文である。人文に就いて考へれば、社會は道で維持される。即ち社會には天子あり、士、農、工、商あり、雜然としてゐるが、彼我の關係を一定せしめる處のものがなければならぬ。君臣父子の關係を規定する處のものがなければならぬ。道から見れば世間は差別界だが、一面から見れば社會は一つの有機的のものである。有機的とは差別と平等とが平行する事だが、社會が混沌としてゐたら如何か、差別ある時にも、平等的に連絡して發展がある。故にヨーロッパの如き個人主義は東洋の道とは絶対に相容れぬ。東洋では道から差別を持つてゐる。が普遍的のもので取りしまる。東洋では道があるから禮を重んずる。禮は社會分子の關係を規定する。人体でも頭は上に、足は下に、口に物をたべ、下は物を出す。若し平等だと云へば如何なる人体となるか、到底完全な人間だと云ふことは出來ぬ。貴賤尊卑は人類社會には有り得べきことで、平等主義、個人主義では社會は成立せぬ。又道と云ふものは天地人を一貫するものである。故に目に見える現象世界は、道と云ふ網で張られてゐる。網は一點を動かせば其の力は他の目にまで及ぶ。人は天地の間にあり、故に人の行は天地に關係する。道德上の理想は、人と自然界とが一致するのがよい。孔子は天人一体を理想とし、佛教では大我と小我との一致を説き、神道では神人合一を説いてゐる。斯くてあらゆる教は普遍の中に没入するにある。ヨーロッパの文化は自然を離れて自然を征服する。ヤソ教に於ても、神と人とは離れたもので、人間が如何に勉強しても神とはなれない。東洋の宗

教は神人同種である。森羅萬象皆道の發現である。支那では聖人、日本では神、印度では佛陀の如きものである。聖人とは何か、天地の道を内聖外王に依りて治めし者である。孔子、孟子、墨子、荀子等の説く所も皆然りである。治國平天下は儒者の理想であるが、諸子百家も亦治國平天下を説いてゐる。故に支那思想は西洋の眞理とは趣を異にする。治國平天下などと云ふ事は西洋にはない。

又、一技に至つても茶の道、劍道、柔道等皆道がある。術と云ふのは道よりも一段低く、手並のことである。道は手並でなく全精神力を集中して初めて達し得るものである。遊藝の如きものでも、精技入神の域に達するには、身命を打込まねばならぬ。此こそ眞の學問と云ふものだ。然るに西洋哲學では眞理の追究があるばかりである。哲學は、知を愛すとか、知を好むとか云ふものである。論理學、認識論など總て理性を中心として科學的にやつて行く。知力偏重で情意の陶冶を忘れてゐる。何人か西洋哲學を讀んで感奮興起したものがあらうか。西洋哲學は論理は精密でも心の奥底にしみ渡るものがないからである。明治の初め、我が文部省の方針は、西洋に倣つて、知に偏して人格修養を重んじなかつた。近來稍々神社佛閣を拜するとか、宗教を入れるとか、もがいてゐる。從來の道と云ふ事から云へば、東洋の宗教は宗教であると共に道德であり、儒教の如きは宗教ではないが、矢張り此に依つて確乎たる信念を養ふ事が出来る。道は單なる知識だけではない。倫理も宗教も含んでゐる。現代の欠陥は、未だ走つて本を忘れた所にある。扱次にこの演題の「孫中山に及んで」御話をしたいと思ふ。今や支那問題は全世界の視聽を集めて居り、且つ今日は上海總攻撃が行はれるといふので、いささか際物の感もあるが、現在の中華民國革命の原動力は孫中山である。革命以來二十三年になるが、此の間天下寧日無しといふ感がある。

孫中山は、我が慶應二年に生れて、明治二十年頃香港の醫學校に入つてドクトルになつた。初は彼も憂國の士であつた。二十八年李鴻章に建白書を上つたが、時弊を衝いた堂々たるもので、革命的思想などは含んでゐなかつた。やがてキリスト教に入つて、廣東で中國青年會を立てるに及んで危険人物とされるに至つた。二十九年ロンドンに行き支那官憲の爲に捕はれたが、治外法權に依つて英國から抗議が出て赦された。一時は孫中山の首には十萬弗の懸賞がかけられてあつた。四十四年共和國大統領となつた。孫中山の著書の中で、私は建國方略と三民主義とを見た。「建國方略」の概要を述べると、

#### 一、眞理建設

#### 二、物質建設

#### 三、社會建設

#### 四、國家建設

で、此の國家建設中の八條の中、民族民生民權の三つが所謂三民主義なのである。是等のものが思想の中心をなした。孫中山の思想は科學的で、世の人は「知るは易く行ふは難し」と言ふが、之は誤で「知るは難く行ふは易し」と言ふべきだ。支那人の知識程度が低いので、一層之を増さねばならぬ。知識を増せば歐米の如く富強となることが出来るのである。要は物質文明に役立たしむるための知識である、と説いてゐる。

次に三民主義の中の民族主義について言へば、民族といふものは、言語風俗習慣道德宗教などから自然的に生ずるものである。支那には色々の民族があるが、漢民族が其の中心をなすものである。然るに國

勢日々に衰へ遂には世界の殖民地に類する——亞殖民地——になつてしまふはうとする。思ふに物質文明に於ては支那は西洋に及ばないが、精神文明に於ては遙かに歐米を凌駕してゐる。殊に忠孝、仁愛、信義、和平の諸徳の如きは、我が傳統的な道徳で將來益、發達せしめねばならない。共和國に於ては忠は不要といふ人もあるが、之は國家に對する道徳で大切である。我が國の政治哲學の發達は歐米の遠く及ばざる所である。故に是等を發展すれば必ず國は立派になる、と言つてゐるのである。

孫中山は軍閥などの如く、利を好み、戰を好む低級な人とは違つて、精神的道徳的着方面に眼したことは偉い。然し私をして言はしむれば、何故に忠孝仁愛等個々の徳目のみを舉げて「聖人」と言はなかつたか。何故道と言はなかつたか。王道と云ふことも言つては居るが、其の説たるや帝國主義と同じやうな説明に陥つてゐる。道といふものを明かにせぬから、三民主義は西洋の個人主義をもつて來てゐる。露西亞などの革命精神をも取り入れてゐる。支那の古來の革命には「天命を奉じて」といふ大理想があつた。道があつた。然るに孫中山の革命には道に一言も觸れてゐない。是抑、支那が今日も猶亂れてゐる所以であると思ふ。

今や支那は四分五裂の有様で、國家として少しも統一されてゐない。黨國といふ言葉の示す如く、支那は國民黨なる一黨によつて南京附近に一政府があるといふに過ぎない。道などといふ觀念は今の軍閥には少しもない觀がある。けれども、東洋に於て「道」は根本である。滿蒙新國家も「道」を以て治めねば駄目である。

而して、文理科大學は我が國教育の源泉であるから、道の研究こそ此の大學の任務でなければならな

い。大學令なども「大學ハ道ヲ明カニスルヲ以テ目的トス。」と改むべきであらう。教育勅語にも「斯ノ道」と仰せられて、「斯の眞理」とは言つて居られない。而して道の根本なるものの五倫の道であることは言ふまでもないことである。(七、二、二〇、講演略記、文責在記者)

## 學

高 田 眞 治

こゝに『學』といつても、その内容とか範圍とかは頗る廣いものであるから、こゝでは東洋及び西洋に於ける『學』の傾向の相違、意義、方法について述べようと思ふ。

學即ち學問はこれを爲す主体が個人にある。而してその對象の如何に關せず、價値の普遍妥當性が要求され、東洋西洋支那と區別さるゝことはない。然し之を歴史的に考察すると、その環境、民族、國土に應じて異つた傾向を有するもので、西洋ではエヂプト、ギリシア等の、東洋では支那、インド等の文化が次第に發達し、互に影響交渉しあつて、今日の世界文明を來した。エヂプト文明はアッシリヤより傳はり、ギリシアに傳はつたが、後、之にキリスト教が加つて今日の基礎を爲した。然しキリスト教は佛教と共に宗教として扱ふ可きものなれば「學」の對象とは別個のもの故、今之を除き、主として、支那に起つた學問とギリシアに起つた學問とを觀察してみよう。

一般的には西洋は理論的で、東洋は實踐的なりといはれ、又東洋は家族主義を本とし、西洋は個人主義を本とす、といはれるが之は概括的であつて、東洋西洋必ずしも相反してゐるものではない。然しその